

高齢者の信頼感に関する研究

八田 武俊⁽¹⁾ (hatta@u-gifu-ms.ac.jp)

八田 純子⁽²⁾・岩原 昭彦⁽³⁾・永原 直子⁽⁴⁾・堀田 千絵⁽⁵⁾・伊藤 恵美⁽⁶⁾・八田 武志⁽⁷⁾

〔⁽¹⁾ 岐阜医療科学大学・⁽²⁾ 愛知学院大学・⁽³⁾ 和歌山県立医科大学・⁽⁴⁾ 大阪健康福祉短期大学・
⁽⁵⁾ 愛知学泉大学・⁽⁶⁾ 名古屋大学・⁽⁷⁾ 関西福祉科学大学〕

The study of trust of middle and upper-middle aged people

Taketoshi Hatta⁽¹⁾, Junko Hatta⁽²⁾, Akihiko Iwahara⁽³⁾, Naoko Nagahara⁽⁴⁾, Chie Hotta⁽⁵⁾, Emi Ito⁽⁶⁾, Takeshi Hatta⁽⁷⁾

⁽¹⁾ Department of Medical Technology, Gifu University Medical Sciences, Japan

⁽²⁾ Graduate School of Psychology and Physical Sciences, Aichi Gakuin University, Japan

⁽³⁾ School of Health and Nursing Science, Wakayama Medical University, Japan

⁽⁴⁾ Department of Psychology, Osaka Health and Welfare Junior College, Japan

⁽⁵⁾ Department of Home Economics, Aichi Gakusen University, Japan

⁽⁶⁾ Department of Occupational Therapy, School of Health, Nagoya University, Japan

⁽⁷⁾ Department of Health Science, Kansai University of Welfare Sciences, Japan

Abstract

The first purpose of this study was to confirm that the trust of middle and upper-middle aged people was higher than young people. The second purpose was to examine the relationships between trust and the higher brain function, and the satisfaction for the interpersonal relationship. Participants in the elder group were 304 middle and upper-middle people who were living in a rural community, and the participants in the younger group were 270 college students. The result indicated the trust for message of the other was higher in the elder group than younger group. In the elder group, it was found that the higher trust for the message of the other was, the higher the performance of Stroop task, D-CAT, and the letter and verbal fluency tests were. Furthermore, the more the participants were satisfied about the interpersonal relationship, the higher trust for the message of the other was. However, it was not indicated that the correlation between the trust and the satisfaction for support by friend.

Key words

trust, cognitive function, interpersonal relationship, middle and upper-middle age, college students

1. 高齢者の信頼感に関する研究

近年、振り込め詐欺などの犯罪が増え、社会的問題となっている。とくに、情緒面に訴えかけるオレオレ詐欺では高齢者がターゲットになりやすい(平成20年版国民生活白書)。高齢者が詐欺の被害者となりやすい理由として、永岑・原・信原(2009)は高齢者が他者に対してもつ高い信頼感を挙げている。つまり、高齢者は相手の発した情報を簡単に信頼してしまうため、騙されやすい。しかし、初対面の他人に対する一般的信頼が高い人ほど、本当に信頼できる人かどうかといった他人の信頼性を正しく検知できるとする指摘がある(山岸, 2008)。これらのことから、具体的な方向性は定かでないが、高齢者の信頼感は騙されやすさと関連する重要な要因である。騙されるということは他者が意図的に伝達した真実でない情報を真実として信じることであり(箱田・仁平, 2006)、本研究では、騙されやすさとの関連から他者の発言に対する信頼感について検討した。本研究における具体的な目的は、第一に高齢者の他者の発言に対する信頼

感が高いことを確認することであり、第二は、そうした信頼感を規定する要因について検討することである。

信頼感は社会に適応するうえで重要な心理的要因である。天貝(1995)は信頼感を「自分あるいは他人に対して抱く信頼できるという気持ち」と定義し、自分への信頼、他人への信頼、不信の3次元からなる信頼感尺度を開発した。これら3次元のうち、他人への信頼は他者に対して信頼を抱くという点で、他者の発言に対する信頼感と最も関連が強い。天貝(1997)は信頼感の発達的变化について、成人期以降、自分に対する信頼が安定的であるのに対して、他人への信頼は男性が50歳代で最も高く、その後、若干低下する傾向にあり、女性が40歳代以降増加することを示している。また、不信は男女共に60歳代以降で最も高くなるが、他人への信頼と不信との関係は高齢者において独立した関係にあることが示されている(天貝, 1997)。これらのことは、加齢に伴い他人への信頼感は増加することや、そうした傾向が女性において顕著であることを意味する。また、青年期を含めた研究(天貝, 2001)では、信頼感尺度(成人版)の18項目について年代間の比較を行い、高齢者は若年者よりもすでに構築された他者との関係に対する信頼感が強かった。そこで、本研究では、加齢に伴い一般的な信頼感が増加する

ことから、他者の発言に対する信頼感も増加すると考え、高齢者は若年者よりも他者の発言に対する信頼感が高いと予想した(仮説1)。

本研究における第二の目的は、高齢者の信頼感を規定する要因について検討することである。本研究では、加齢に伴い変化する最も顕著な内的要因として脳機能に注目した。脳機能のうち、とくに前頭葉と関係が深い高次脳機能は加齢の影響を受けやすい。高次脳機能は注意や記憶、言語などの認知機能を含み、適切な思考、判断、行為をする上で重要な役割を果たす。このことは、高次脳機能は適切な社会的判断の基盤をなすことを示唆している。村井(2009)は高次脳機能障害の患者に感情のコントロールができず、そうした患者の多くは腹内側前頭前皮質に損傷があることを報告している。また、前頭葉内側部損傷は社会的活動や意思決定に強く関係していることも報告されている(小早川・鶴谷・河村, 2008; 鈴木, 2008)。信頼感は社会的知能の一部であり、一般的な他者に対する信頼感が高い人は他者の情報に対して敏感で、他者の行動を正確に予測できるため、適切な社会的判断が可能である(山岸, 2008)。このことは高次脳機能が高い人ほど他者への信頼感が高いことを示唆している。それゆえ、高齢者の信頼感について、高次脳機能が高い人ほど他者の発言に対して高い信頼感を示すと予想できる(仮説2)。

つぎに、高齢者の信頼感を規定する他の要因として対人関係に注目した。満足できる対人関係や友人関係を有する人は、自己以外に信頼できる他者の存在を知覚する機会が多いため、一般的な他者に対しても高い信頼感を抱きやすい。永田・岡本(2008)は、他者との葛藤や危機をとおして、その関係や出来事を意味があると認識できることや、それが他の一般的な関係にも普遍化される関係を発達の関係と定義し、そうした関係を有する人はそうでない人よりも他者への信頼感が高いことを示している。このことは、満足度の高い関係や良好な人間関係を形成することが信頼感を促すことを意味する。また、関係性の発達は社会的な成熟を意味し、それは社会的知能の一種である。社会的知能の高さが信頼感を促す可能性があることから、満足できる対人関係や友人関係を有する人はそうでない人よりも他者に対する信頼感が高いだろう(仮説3)。

2. 方法

参加者のうち、高齢群は北海道 Y 町の住民で、生活調査票に含まれる本研究で用いた項目に回答し、住民検診を受診した 304 名(男性 179 名、女性 125 名)であった。高齢群における年齢の分布は 39 ~ 89 歳で、平均年齢は 64.6 歳($SD = 10.98$)であった。若年群は東海地方にある 4 年制大学の学生で、回答に不備のない 270 名(男性 115 名、女性 155 名)を対象とした。若年群における年齢の分布は 18 ~ 31 歳で、平均年齢は 18.89 歳($SD = 1.44$)であった。

2.1 手続き

高齢群の調査では、調査者が 2009 年 7 月に生活調査票を郵送し、8 月 28 日から 30 日に実施された住民検診を受診する際、持参するよう求めた。また、高次脳機能については、調査者が住民検診における検査で測定した。若年群の質問紙への回答について、調査者が大学での講義終了後に質問紙を配布し、参加に同意できる人のみ回答するよう求め、その場で回収した。

2.2 質問項目

本研究では、他者の発言に対する信頼感について測定するため、「見ず知らずの人の話は疑って聞く(逆転項目)」「知り合いの人の話は信用できる」「家族の話は全く疑わない(逆転項目)」について 4 点尺度で回答を求め、それらの合計得点を信頼感得点とした。次に、生活調査表の項目のうち、高齢者の対人関係に関する満足度として「人間関係に満足していますか?」、友人関係によるサポートの満足度について「友人たちの支えに満足していますか?」という 2 項目を用いた。両項目は、「全く不満(1) ~ 「非常に満足(5)」の 5 点尺度であった。

2.3 高次脳機能検査課題

本研究では、2009 年に実施された住民検診で用いた認知機能検査バッテリーのうち、記憶機能を測定する検査項目として Wechsler 記憶検査の散文記憶課題を用いた。この課題では、調査者が 25 のユニットからなる文章を 2 回読んで聞かせ、その直後に参加者がその文章を自由に再生する。課題の得点は 1 つのユニットに対する正答につき 1 点で、最低が 0 点で最高が 25 点である。

空間認知機能を測定するための課題として Money 道路図検査を用いた。この課題は練習思考と本試行からなり、2 cm 幅の線分を道路と見立て、練習思考では 4 箇所の曲がり角、本試行では 12 箇所の曲がり角がある。被検査者は各曲がり角で左右のどちらかに曲がればよいかを答える。この課題の得点は 1 つの正答につき 1 点で、最低が 0 点で最高が 12 点である。

注意機能と実行系機能を測定するための課題として Stroop 検査を用いた。この課題は 5 行 8 列の赤・青・黄・緑色のインクで描かれたドットからなるドット図版と、その 4 色のインクで描かれた漢字からなる Stroop 図版があり、Stroop 図版では漢字の読みとインクの色が一致しないように配置されている。被検査者は両図版のインクの色をできるだけ早く正確に回答するよう求められる。この課題では、すべてのインクの色に回答するまでの反応時間を測定した。

情報処理速度、注意機能と実行系機能を測定するため、D-CAT 検査を実施した(八田・伊藤・吉崎, 2001)。この課題は、ランダムに配置された一桁の数字の列を順番に見て、参加者が 1 分間のうちにその中から指定された数字を探して抹消するというものである。指定される数字は「6」だけの場合と「8」「3」「7」の 3 文字の場合があり、被検査者はこれらの両試行を行った。この課題では、正

しく検索された数字の個数を1個につき1点とした。また、検索した数字の全体数のうち検索されずに見落とされていた数字の割合を見落とし率とした。

言語機能を測定するための検査として、文字流暢性課題と意味流暢性課題を用いた。文字流暢性課題は1分間のうちに「あ」または「か」のいずれかの文字から始まる普通名詞について、意味流暢性課題は1分間のうちに「スポーツ」と「動物」のいずれかのカテゴリーに属する対象について、重複を避けてできるだけ多く回答するというものであった。被検査者は文字流暢性課題と意味流暢性課題を行い、ランダムに割り当てられたいずれかの文字とカテゴリーについて回答した。両課題において、重複した反応を除いた反応数を1個につき1点とした。

3. 結果

3.1 他者の発言に対する信頼感

本研究では、他者の発言に対する信頼感の発達的变化を検討するため、他者の発言に対する信頼感を測定した4項目の合計点について高齢群と若年群を比較した。その結果、高齢群は若年群よりも有意に信頼感得点が高かった ($t(572) = -6.15, p < .01; M = 9.50$ vs. 8.69)。

3.2 信頼感と高次脳機能

他者の発言に対する高齢者の信頼感と高次脳機能との関連について調べるため、高齢群における信頼感得点と高次脳機能検査の各課題得点を要因とする相関分析を行った。分析の結果は、信頼感得点がドット図版における反応時間やD-CATにおける見落とし率と有意な負の相関関係にあり、文字流暢性と意味流暢性の両得点と有意な正の相関関係にあることを示している (表1)。

3.3 信頼感と対人関係

対人関係と友人関係によるサポートの満足度に関する項目得点について、「全く不満 (1)」と「不満 (2)」を不満群、「どちらでもない (3)」を中間群、「満足 (4)」と「非常に満足 (5)」を満足群とし、対人関係要因と友人関係要因を設けた。つぎに対人関係における満足度が他者の発言に対する信頼感に及ぼす影響を調べるため、信頼

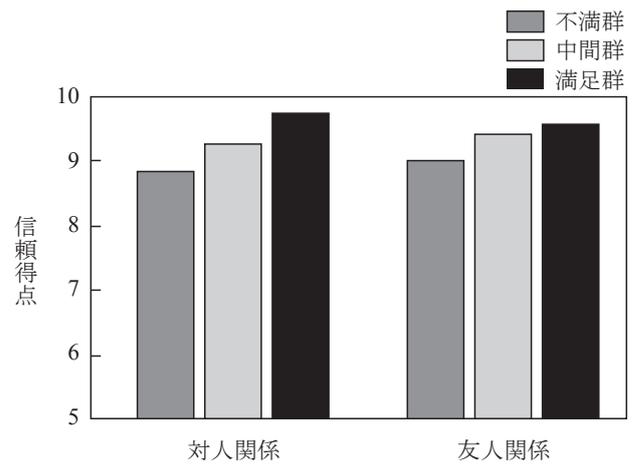


図1：対人関係が信頼感に及ぼす影響

感得点を従属変数、対人関係要因と友人関係要因を独立変数とする分散分析を行ったところ、対人関係要因の効果は有意であったが ($F(2, 301) = 4.76, p < .01$)、友人関係要因の効果は有意でなかった ($F(2, 301) = .616, n.s$)。図1に示したように、対人関係における満足群は中間群と不満群よりも他者の発言に対する信頼感が高かった。ただし、対人関係要因の不満群は17名、友人関係要因の不満群は4名しかいなかった。そこで、相関分析を行ったところ、対人関係の項目得点と信頼感の項目得点間にのみ有意な正の相関関係が示された ($r = .18, p < .05$)。

4. 考察

本研究の目的は、高齢者が騙されやすいことの原因として、高齢者の他者の発言に対する信頼感とそれを規定する要因について検討することであった。そこで、本研究では、他者の発言に対する信頼感について高齢者と若年者を比較した。その結果、高齢者は若年者よりも他者の発した内容を疑わず、信頼しやすいことが明らかとなった。このことは、高齢者は他者の発言に対する信頼感が高いことを示しており (仮説1を支持)、加齢に伴い他者の発言に対する信頼感は増加する傾向にあることを示唆している。

表1：信頼感と高次脳機能検査課題得点との相関分析

	1	2	3	4	5	6	7
1. 信頼感							
2. MMSE	.068						
3. ドット図版	-.160*	-.314**					
4. Stroop図版	-.09	-.297**	.745**				
5. D-CAT (作業量)	.071	.238**	-.547**	-.511**			
6. D-CAT (見落とし率)	-.193**	-.165**	.208**	.263**	-.098		
7. 文字流暢性	.119*	.186**	-.325**	-.288**	.333**	-.120*	
8. 意味流暢性	.208**	.218**	-.431**	-.394**	.456**	-.169**	.358**

つぎに、本研究では、高齢者の他者の発言に対する信頼感を規定する要因について検討した。第一の要因は前頭葉機能で、これが高いほど他者に対する信頼感も高いと考えた。分析の結果は、高齢者の信頼感が高いほどストループ課題に要する時間が短く、D-CATにおける見落とし率が低く、文字と意味の両流暢性課題の成績が良いことを示しており、総じて高次脳機能が良好であるほど信頼感が高いことを示唆するものであった（仮説2を支持）。ただし、散文記憶課題やMoney 道路図検査に関して、信頼感との関連は示されなかった。これらの結果は、記憶課題が前頭葉よりも側頭葉との関連が深いとする脳画像による資料（Hatta et al., 2008; 2009）やMoney 道路図検査は右半球の頭頂葉機能を反映するものであり、個人の注意機能や実行機能を担う前頭葉機能との関係が希薄であることの反映と考える。

他者の発言に対する信頼感を規定する要因は脳機能以外にもある。本研究では、信頼感は満足度の高い人間関係において機能すると考え、信頼感と対人関係や友人関係によるサポートの満足度との関連について検討した。分析の結果、対人関係への満足が高い人はそれが中程度の人や不満を感じている人よりも他者の発言に対する信頼感が高かったが、友人関係によるサポートの満足度による影響は示されなかった（仮説3を部分的に支持）。それゆえ、一般的に他者との関係に満足している高齢者は、他者の発言を信頼できると判断する傾向がある。

本研究の結果は、高齢者において他者の発言に対する信頼感が高いことを示しており、それゆえ信頼感の高さが騙されやすさと関連する可能性がある。しかし、本研究は信頼感と騙されやすさの関係を直接検討していないため、信頼感が高いほど騙されやすさとは限らない。その理由として、本研究の結果は、高齢者において高次脳機能が良好なほど信頼感が高いことを示しており、高次脳機能は高齢者の信頼感を規定する要因の一部と考えることができる。もし、高次脳機能が適切な社会的判断を促すならば、高次脳機能が高いほど、信頼感は高く、騙されにくいと考えることができる。今後の課題は脳機能や信頼感と騙されやすさとの関連について検討することである。

つぎに、本研究の結果は若者より高齢者において信頼感が高く、その信頼感は脳機能検査の成績と正の相関関係にあることを示しているが、高次脳機能は加齢とともに低下していくことから、これらの要因間の関係に矛盾が生じる。しかし、信頼感を規定する要因は脳機能や対人関係のほかにも考えられ、とくに本研究の若年群は青年期であり、発達段階において信頼感の規定因が変わっていくことも考えられる。今後の課題は、発達段階ごとに信頼感を規定する要因を明らかにすることと、加齢に伴う要因の変化について検討することである。

引用文献

天貝由美子（2001）. 信頼感の発達心理学—思春期から老年期に至るまで. 新曜社.

天貝由美子（1997）. 成人期から老年期にわたる信頼感の発達. 教育心理学研究, 45（1）, 79-86.

天貝由美子（1995）. 高校生の自我同一性に及ぼす信頼感の影響. 教育心理学研究, 43（4）, 364-371.

Baron-Cohen, S, Ring, H.A., Wheelwright, S., Bullmore, E. T., Brammer, M. J., Simmons, A., & Williams, S. C. (1999). Social intelligence in the normal and autistic brain: An fMRI study. *European Journal of Neuroscience*, 11（6）, 1891-1898.

箱田裕司・仁平義明（2006）. 嘘とだましの心理学—戦略的なだましからあたたかい嘘まで. 有斐閣.

八田武志・伊藤保弘・吉崎一人（2001）. D-CAT（注意機能スクリーニング検査）使用手引き. ユニオンプレス.
Hatta, T., Kanari, A., Mase, M., Kabasawa, M., Ogawa, T., Shirataki, T., Hibino, S., Iida, A., Nagano, Y., Abe, J., & Yamada, K. (2008). Brain mechanism in Japanese verbal fluency test: Evidence from examination by NIRS (Near-Infrared Spectroscopy). *Asia Pacific Journal of Speech, Language and Hearing*, 11, 103-110.

Hatta, T., Kanari, A., Mase, M., Nagano, Y., Shirataki, T., & Hibino, S. (2009). Strategy effects on word searching in Japanese letter fluency tests: Evidence from the NIRS findings. *Reading and Writing*, 22 1041-1052.

小早川陸貴・鶴谷奈津子・河村満（2008）. ギャンブルする脳. 岩田誠・河村満（編）. 社会活動と脳：行動の原点を探る, p.113-132. 医学書院.

村井俊哉（2009）. 人の気持ちがわかる脳—利己性・利他性の脳科学. ちくま新書.

内閣府. 平成20年版国民生活白書. http://www5.cao.go.jp/seikatsu/whitepaper/h20/01_honpen/html/08sh020103.html#08sh21330c.

永岑光恵・原壘・信原幸弘（2009）. 振り込み詐欺への認知科学からのアプローチ. 社会技術研究論文集, 6, 177-186.

永田彰子・岡本祐子（2008）. 重要な他者との関係を通して構築された関係性様態の特徴—信頼感及びアイデンティティとの関連. 教育心理学研究, 56（2）, 149-159.

鈴木匡子（2008）. ヒトの意思決定のメカニズム. 岩田誠・河村満（編）社会活動と脳：行動の原点を探る, p.97-112. 医学書院.

山岸俊男（2008）. 日本の「安心」はなぜ、消えたのか. 集英社.

（受稿：2010年11月12日 受理：2010年12月20日）